

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第一号
平成二十七年三月二十五日発行（抜刷）

講演

平成二十五年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

（平成二十五年七月二十五日 於四号館 四三一教室）

伊勢の式年遷宮

中西正幸

平成二十五年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

(平成二十五年七月二十五日 於四号館 四三一教室)

伊勢の式年遷宮

中西正幸

【岡野友彦】皇學館大学研究開発推進センター長の岡野友彦と申します。本日は、大変暑い中を、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所平成二十五年公開学術講演会にお集まり頂き誠に有難うございます。神道研究所は、昭和四十八年に出来て今年で四十周年という、本学附置研究機関でございますが、この四月から、史料編纂所・神道博物館と合わせて皇學館大学研究開発推進センターという一つの組織になりました。神道研究所は、毎年、公開学術講演会と公開学術シンポジウムを開催しております。今年は、ご遷宮の年であり、いよいよ明日から御白石持も始まり、伊勢の町も心なしかわくわくしているような気が致しております。本日は、このご遷宮の年に実に相応しい先生をお招きすることが出来ま

した。國學院大學神道文化学部教授の中西正幸先生です。中西先生は、昭和十九年に三重県でお生まれになり、國學院大學大学院文学研究科を修了された後、神宮権禰宜、総務部弘報課長などを経て、現在は國學院大學神道文化学部の教授で、博士（神道学）の学位をお持ちでいらっしゃいます。ご専門は、神宮学・神道祭祀学です。主要業績として、『伊勢の宮人』、それから『神宮祭祀の研究』、それから、『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』などが挙げられます。ご紹介しきれない程のたくさんのご業績をお持ちです。このご遷宮の年に開催される神道研究所の公

開学術講演会としては、まさに余人をもって代え難い、そういう先生を本日はお招き致しました。これから、八月、九月、そして十月と、この伊勢の町をあげて、ご遷宮をお迎えするという時に、中西先生のお話を伺って、ご遷宮の詳しい知識を勉強させて頂きたいと考えております。それでは、中西先生、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

【中西正幸】ただ今ご紹介を頂きました中西正幸でございます。神宮と極めて深い関係がある皇學館大学から遷宮の講演をと言うお話を頂き、大変光栄に存じておるところです。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。今年の年明けでございましたか、神宮の参拝予想は一千万と言われておりました。しかし、上半期の六月末の統計を見ますと、六百五十万人でございます。ですから、今年は式年遷宮を迎える年に当たり、おそらく一千万万人にまで達するのではないかと言われております。一般の方々からすれば心の故郷伊勢を訪ねてみようということで、参拝客がどんどん日に増えています。とりわけ明日から始まるお白石持行事というものは、新しくなった御殿を一目拝したいものだということ、実に沢山の人がお見えになり、心から楽しい時と言えます。私も八月三日に、慶光院曳に加えて頂き、大学院・学部のゼミ生と共に参加出来ることが、誠に楽しみです。こ

のような時に、式年遷宮の講演をとお話を頂き、本当に喜んで伺った次第です。その中で、九月十三日から始まる御戸祭というお祭りがあり、十月二日は内宮、五日は外宮の遷御の儀が斎行されます。しかし、式年遷宮のお祭りは、実は十三祭もございませぬ。あしかけ八年を要したこの歲月の中で、お祭りが行われてきたのです。今から残っている後半部分のお祭りは、僅かに二十日間ほどの間に全て執り行われ、それらが式年遷宮祭です。ですから、本日の講演では御戸祭から十月初めに斎行される遷宮祭について、お話しさせていただきます。

一、遷宮諸祭

そこで、お手元の資料十三番の御戸祭をご覧ください。御戸祭は、「頭工が新殿扉に鑰穴を穿って、竣工を告げる祭儀」です。頭工というのは宮大工です。御殿は既に建っておりますけれども、宮大工が正式な竣工を告げるお祭りが「御戸祭」なのです。宮大工の総仕上げに当たります。これが終ると御殿・御門の御鑰が宮大工から神職に引き渡されますが、この御戸祭はどこまで遡れるのかという問題があります。史料としては『遷宮例文』という書物があります。これは古代末から中世初めにかけての十八回の遷宮記録を集めたダイジェスト版であると言われ、その中に「御戸立祭」あるいは「清鑰」という言葉が見えております。清鑰も宮大工たちが、最後に殿内・殿外すべてに鑰がけをして、神職に引き継ぐという重要なお祭りであります。ところが清鑰というのは、どうも近世以来あまり言われませぬ。近代も明治二十年（一八八七）遷宮で先ほど申し上げたとおり、鑰穴を穿って祭儀が終わるといふことです。ですから現行の式次第は、清鑰という鑰をかける行為が、やや後退した点が特徴であろうと思えます。

次に御船代奉納式です。御船代というのは、御神体を納める清浄な御器です。カヌーのような形をしまして、ちょうど印籠のように上下合わせ蓋になって

います。もちろん御船代祭というお祭りをを行い、材木を採りました。平成十七年（二〇〇五）五月に伐採を行って、それが御倉に納めてありました。その採った材木に細工を施して、殿内に納めるといふのがこのお祭りです。享保十四年（一七二九）の『外宮遷宮記』を見ますと、秘儀として触れてあります。欄宜が御鑰を捧げて御扉を開き、東宝殿を開いて御船代を生絹で覆い、御殿の中に据えまつるといふことが書かれています。せんぐう館には、外宮の御正殿と同寸法の展示がございませぬ。せんぐう館には、御船代祭に使う鑰も展示してあり、御船代を扶る非常に珍しい鑰です。それから、御樋代というもう一つ主要な器物がございませぬ。これは、明治二十二年（一八八九）に、明治天皇の「もう二度とそれは開けることなく、封をしたままで伝えなさい。」という命令がございました。そして、翌年（一九〇〇）には、内宮の御正殿が火災に遭い、臨時遷宮が行われました。この時に明治天皇からの勅封という形で、今日まで伝わっています。

さて、次は洗清です。内宮では九月二十四日に行われます。この洗清とは、御殿が宮大工から神職に引き継いだ後に、御殿を全部「洗う・清める」ということがこのお祭りです。新殿の竣工に伴い、欄宜たちが、清水で洗清をします。ここで重要となるのが水です。内宮は五十鈴川の水、外宮は御井の水を使います。そして、御神体を納める御樋代、さらにその外側の御船代などをそれぞれ洗い清めます。この祭儀は欄宜が殿内、権欄宜が殿外を洗い清めます。しかし、一点だけ重要な点あります。それは、御饌殿についてです。御饌殿は、外宮の北東の隅にありますが、この所管は内宮です。外宮にありますが内宮所管の建物となっております。この時に御饌殿の洗清があることは、とても重要なことであると思っております。

それから、次は心御柱奉建です。これは「御稲御倉に奉安してきた心御柱を、新殿の床下に秘めやかに立て、柵葉を覆いまつる」といふ祭儀です。心御柱とは御殿の構造とは何の関係ありません。つまり、建築上は力学的な繋がりを持っていない約一メートル余の柱で、この心御柱が神様の宿る霊木であると固く信じら

れてきました。今日では御殿を先に建てた後に、床下に心御柱を立てるといふ順序になっています。しかし、歴史的には、心御柱奉建は、立柱祭の最初で行いました。古くは心御柱を奉建するまで、他の柱穴は掘らないのが原則でした。柱を立てる時に、最初に立てられるのが、心御柱というのが古い時代からの言い伝えです。ただし、今日では、九月二十五日に行われています。つまり、遷御直前の時期に移ったということが重要な点です。神宮最古の文献である『延暦儀式帳』の中には、欄宜の他に大物忌という神聖な童女が、心御柱を立てるといふことが見えています。また、『延喜式』にも同様に見えております。心御柱を立てた後に正殿の四隅柱に及ぶという事になっていますから、その点が古い原則と現状とは、相違があるということに注意が必要です。

心御柱に関して問題となるのは「立て違い」という場合があります。これは、立てた柱の位置が、間違っているということです。そして、立て違いであったために、仮殿遷宮を行わなければならないという事態が、歴史的には何度かありました。例えば、建久七年(一一九六)六月の『欄宜注進状』には、欄宜たちが朝廷に奏上した中に、心御柱が「東方に四寸、北方に二寸三分」ずれていたことが記されています。全体として、大きな誤差ではありませんが、立て違いにあたります。そのために、仮殿遷宮が行われました。つまり、心御柱は、それほど神聖で丁重に扱われてきたということだと思います。

九月二十八日には杵築祭が行われます。杵築祭は、新殿の柱面・大宮所を撞き固めるお祭りです。まず古式饗膳を行います。五丈殿で御馳走を召し上がって頂き、その後に奉仕員が真っ白な杖を一本ずつ受け取り御殿に向かいます。そして、『室寿の古歌』を誦みます。

かしこしや 五十鈴の宮の杵築してけり 杵築してけり 国ぞ栄ゆる 郡ぞ栄ゆる 万代までに 万代までに
古歌とありますから、古くから伝わっている新しく出来た建物を寿ぐ歌です。

その後に、神職が倭舞を納めます。今日の杵築祭は以上が大まかな概要です。しかし、歴史的には、これだけではない部分が見えてきます。『延暦儀式帳』では、正殿の大宮所に「役夫」と記されています。役夫とは、人夫と全く同じ意味で、人夫たちが運んだ土を均して置き、そして柱面を打ち固めるという第二の作業に入っていきます。つまり、第一番は土を均す、第二番が杖で柱面を小突くという二つの作業がありました。御白石持が、明日から始まりますが、これは石持ちなのです。石持ちの前に何があるかという点、砂持ちがあり、その前に土持ちがあります。土を入れ均すというのは御白石持を指し、杵築祭も一つの行事でした。御白石持は、土を入れ、砂を入れ、石を入れるという第三番目の作業であるといふことが重要になります。また、白い杖については、檜が使用され長さが五尺三寸、切り口が一寸です。さらに、この時に明衣を賜るといふことが、昔からの慣例でした。明衣とは、清浄な衣服という意味です。宮司あるいは欄宜等が、御遷御の時に、袍の上へ着ています。しかし、権欄宜以下は、折り畳んだ形の物を肩から脇に下げています。これを掛明衣と言います。杵築祭は、この掛明衣を着けて奉仕します。これは遷宮のお祭りの中でも、特別なお祭りに位置付けられていると考えられます。

次に後鎮祭です。一般的には、建築前に地鎮祭を行います。後鎮祭とは、建物が建った後で行う鎮めの祭りです。神宮では鎮地祭だけではなく、後鎮祭も行うということが重要な点です。

次に御装束神宝読合です。遷御前日の十一月一日に行なわれ、新たに調進された御装束神宝を新四丈殿で検分します。まず、御装束神宝の内容に間違いはないか、寸法などについて点検が行われます。御装束は、お召物や殿内奉飾品です。神宝は、殿内奉納の威儀物になります。威儀物とは、権威を示す品のことです。『延暦儀式帳』によると、内宮は新殿遷奉御装束九品、樋代装束六種、出坐御床いせごとこに関するものが七十七種類、宝物が十九種類と記されています。ちなみに出坐御床と

は、神様が昼間おられる神座のことです。外宮に対しては、御装束物三十六種という以外に、『延暦儀式帳』には何も触れられていません。つまり、外宮は、宝物がなかったというような推測が出来ます。しかし、現在は外宮も宝物があるのではないかという疑問が生じましょう。最後の表をご覧ください。この表は、内宮は元亨三年(一一三三)から明治二十二年(一八八九)、外宮は永祿六年(一五六三)から明治二十二年(一八八九)までの御宝物が、行列の中に出てきます。この一覧表を見ると、外宮の宝物が見えますが、これは後々に加進された宝物です。特に中世末から近世初めに非常に多く加えられました。表の中からは、元祿二年(一六八九)に圧倒的に増えていることがわかります。捧持する人々を含めると、二百三十七名が奉仕しました。今日では、外宮の遷御に携わる人は六・七十名ほどですから、その四倍近くの人が、行列を組んで並んだことが窺えます。これは元祿遷宮において、歴史的にどのような宝物が外宮の方で調進されたかがわかると思います。外宮領と内宮領とを比べると、外宮領の方が経済的に豊かでした。そのような事情も、この行列に反映しているのだらうと思います。

次に『寛正三年内宮遷宮記』には、御装束神宝読合が行われる遷御の四日前の状況が記されています。今日では遷御前日に行われますが、中世末には、三・四日の猶予を見て点検をしていました。十一月二十四日に、宮司・禰宜が齋王候殿に参進します。この齋王候殿は、現在の四丈殿のあたりにありました。現在の御垣内の中で、手前に一番大きく見える御殿が四丈殿です。この齋王候殿で読合を始めると、辛櫃に御金物が付いていないという事態になりました。そして、辛櫃を肩に担うための「杓(おうこ)」という棒も付いていませんでした。つまり、辛櫃の姿形を成していなかったのです。また、官符に合わせて行事が進みますが、これは朝廷の目録に従って子細に宝物を点検するという事です。二十四日から二十五日までの二日間にわたり、読合が行われました。外宮の御装束として第一番の屋形紋・錦御被という、夜寝る時の夜具のような掛物があります。これに問

題があったということです。神宮側は、京都の行事官に御装束の現物を突き返していますし、さらに玉纏御太刀・須賀利御太刀にも問題があったということです。現在の式年遷宮には、六十振の刀が鍛えられます。その第一番目が玉纏御太刀であり、第二番目が須賀利御太刀です。その一番目と二番目の太刀に問題があるということは重大なことを意味します。つまり、中世末葉の神宮が一番疲弊している時の宝物は、調製が難しかったということになります。神宝を行事官に返したということは、御装束神宝読合が形式的に品物を点検するという行事ではなく、どうしても読合を行わねばならない時代で、必然的に行われていたと理解できます。さらに一つだけ例をあげますと、享保年間(一七一六～一七三五)に久志本常彰という神職がいますが、この常彰が克明にメモを残しているので紹介します。当時どれほど読合が大事で、目利きができないと行事官と渡り合えないという内容を記しています。読合の場面において、行事官と神職は対立する程に、激しい議論を交わす一端を窺い知ることができます。

次に送文と木尺についてお話します。『寛永九年外宮遷宮記』によると、九月二十九日から読合が行われ、行事所において読合役人が式目の読合せをしましたが、この式目は非常に大事です。中世までは天皇から送文が届いていましたが、近世になると、それが途絶えました。そこで、宝物を作る人たちが調製した品々の目録に合わせて行うようになり、その目録が式目です。この式目に従って、一つ一つの品々に木尺を用いて測るという形で行われ、今日でも続けられています。これは激動の時代であれば、神職と伝統工芸者達とが、激しい議論をした場面もあったということが推測できます。

次は川原大祓です。今日では十月一日の午後四時に行われます。川原大祓とは、遷御前日に祓戸神の靈威を讀えて、遷御の御列に用いられる奉遷御料や神宝辛櫃二十四個、端麗な奉仕姿の奉仕員すべてを祓い清めます。今回から辛櫃が、赤と黒とで塗り分けられ、従来の川原大祓とは情景が一変すると思います。ここ

で、注目しておきたいことは、『延暦儀式帳』によれば、式年遷宮を担当する最高の役職は造宮使で、この当時は勅使が造宮使を兼務するということになっていました。そして、使の次は王で、王という位にある高級な貴族のことです。造宮使や王が御装束神宝を神宮に届け、大宮司と共に玉串所に至ることは記していませんが、川原大祓を受けたとは一切書いてありません。つまり川原大祓というのは、本来は神宮の職員だけが行うお祓い行事でした。ところが、『建久元年内宮遷宮記』を見ると、そのあたりの様子が違っており、御装束と諸員を一緒に集めてお祓いをしたことが記されています。現在の姿は、中世の建久元年（一一九〇）以降の伝統によるものです。この点については、『延暦儀式帳』までは遡れないということを理解しておく必要があります。

さらに注意が必要な点は、建久元年（一一九〇）の川原大祓では、御装束と諸員一緒に祓っていました。大祓が後退していくことがありました。中世末葉になると、遷宮と川原大祓とは密接な関係をもたなくなってしまう、あるいは廃絶していたのではないかと感じさせます。寛永二年（一六二五）の遷宮に際して、川原大祓を復興されました。この時には、禰宜・権禰宜・内人が奉仕しましたが、祭主や宮司は川原大祓に参列していません。今日の川原大祓には祭主以下が並びますが、これは近代以降の姿であり、近世までは参列しなかったのです。明治二十二年（一八八九）の時に、祭主以下が新四丈殿での読合後に、川原に出て一斉にお祓いをするという形になりました。川原大祓には、歴史的変遷があるということに注意が必要です。

二、遷御

ここからは十月二日の遷御当日のことについてお話ししたいと思います。当日には、まず御飾が行われます。これは遷御当日に大宮司・少宮司・禰宜以下が、

新旧両宮を御装束・神宝で殿内を装飾し、遷御の諸準備を整え、祭主の検知を仰ぐという行事です。『延暦儀式帳』には、「新宮仕弓遷奉状（にいみやつかえまつりてうつしまつるかたち）」、「御装束儲備奉進状（みしようぞくまけそなえてたてまつるかたち）」とあります。その二つの文章が非常に重要です。まず神遷しがあり、その後で目録どおりに殿内に、御装束・神宝を納めるということになります。外宮では、十三日に壁代・帷子を装飾し、十五日に御装束物を進納しました。二日がかりの殿内御飾・装飾が行われていたことが読み取れます。飾り付ける順序は、まず御幌というカーテン状の物を出入り口につるします。そして内部に神座を組んで行きます。これを御蚊屋天井といいます。そして、天井の裏に対して絹を張り、壁を絹で囲み、これを壁代といいます。そして、土代といって、土の代わりとなるような麻の敷物を下に敷きます。ここで問題なのは、読合と御飾という二つの行事があるということです。明らかな区分がついていないのが、古代から中世への姿でした。今日では読合と御飾が、二つに区別されていますが、中世までは混然一体となっていたと考えられます。

さらに、裁縫ということが行われていました。裁縫行事には絹垣と行障が関係します。絹垣と行障は、古代社会では官下物といい、天皇から賜る物でした。しかし、中世以降は、神宮独自で調製することになり、朝廷はこれに関わりを持たなくなりました。神宮としては、絹垣と行障を作りあげる工程を裁縫と呼んでいました。つまり、絹垣と行障の調製が必要となり、そのために裁縫行事が行われたということが近世以降の例です。慶長十四年（一六〇九）の遷宮の際には、東宝殿の下で、権禰宜が絹垣・行障を糸針で縫い、支え棒に紙送りで結わえました。いよいよ遷御の時を迎えます。遷御は午後八時です。大御神が正殿から新殿へと御渡りになる遷御は、遷宮祭さつての至高の秘儀です。参道沿いの奉拝者が厳肅な時刻を待つとともに、勅使・祭主以下が参進して古殿の御扉を開き、召立に連れて前陣・後陣の列次を組みます。午後八時の前には「カケコー」と鶏の鳴き声

をなぞり、午後八時に勅使が「出御」を唱えます。絹垣に秘められた大御神の御列が、瑞々しい新殿へと御渡りになられるのです。資料の『建久元年内宮遷宮記』と『寛文九年外宮遷宮記』をご覧ください。その中で特に『寛文九年外宮遷宮記』を見たいと思います。それによりまずと、まず禰宜以下が庁舎に列立します。次に仮御樋代・絹垣・行障を出します。仮御樋代は、古殿から新殿への遷御の行列のときのみ使う器物です。続いて、正・権禰宜が御池祓を受けます。遷宮のお祓いは、通常のお祓いとは違い、外宮の場合は、外宮の中の御池の畔で行われます。次に奉遷使・祭主・宮司も二鳥居で清め、玉串行事所で太玉串を執り、正宮に納める玉串行事があります。玉串行事が終わると正殿・東宝殿を開き、使である祭主の告刀があります。そして、禰宜が新宮の御扉を開きます。召立につれて神財を捧げ持ち東西に分かれて立ちます。進御して、ここで遷御ということになります。そして、新宮前にて再び召立をし、神財を殿内外に納めます。奉遷使である祭主、宮司・禰宜が、一殿につき饗膳ということを行います。饗膳に対しては、報告の書面が必要となり、それを勤行文といえます。勤行文は天皇に報告する文書です。この勤行文に際して、禰宜・宮司・祭主が署名をして帰館します。

寛文の遷宮時に重大なことがあります。遷御の行列が、御垣内の中でのみ行われるということ。参道に奉拝するのが現代の姿ですが、これは寛文遷宮以後のことです。これ以前は、仮殿遷宮の奉仕ですから、御垣内を右ないしは左に曲がって、いきなり隣の御殿へ遷るということが今日と異なっています。つまり、奉遷路が違うということが重要なことです。また先ほど、外宮では元禄遷宮のときに、宝物が非常に多かつたと述べました。まず具体的には、蟻螂型の御太刀があります。蟻螂というのは、カマキリのことです。カマキリの腕の形をした太刀で、しかも曲がっているのではないかと思われれます。また、琴の尾が鶏の尻尾のような状態になっている鶏尾御琴、玉簾のような物で、貴人が腰の辺りにつける玉佩も元禄遷宮で見ることが出来ます。

次に御遥拝について説明します。これは天皇陛下が御遥拝になる儀式で、伊勢の式年遷宮のみ行われます。『禁秘御鈔』によれば、寛治六年（一〇九二）の仮殿遷宮の夜に、堀河天皇が朝廷において、御拝あらせられました。庭上御拝です。から、天皇が庭に下り大地に跪くような形で、御遥拝されるのが伊勢の遷宮です。明治二年（一八六九）九月の例は、内宮は四日、外宮は七日に遷御がありました。明治天皇は、遷御と同時に皇居の庭上に下り立たれて、遷御の儀を御遥拝なされた記録が残っています。このようなことから伊勢の遷宮の格式は、極めて高いものであるということを知ることができます。さらに、昭和四年（一九二九）の遷宮には、内閣総理大臣・内務大臣・三重県知事等が参列し、最高の儀式が行われました。昭和四年（一九二九）の遷宮を基本として、今日も御儀が続けられています。

三、遷御後

次は大御饌です。式年遷宮の歴史の中で、三十四回までは遷宮と神嘗祭と重なっていたことが重要な点になります。つまり、遷御の次に行われるお祭りが重要で、遷宮だけでは意味をなしません。したがって、初回から三十四回までは、遷御を行った後に神嘗祭を行っているのです。これが、本来の神嘗祭より大きな神嘗祭という意味で、「大神嘗祭」と呼ばれていました。しかし、ここから遷宮だけ分離してしまいました。殿舎などがまだ完成していない、神宝が京都から届いていないなどの事情で、式年遷宮が分離していったということが歴史の流れです。中世から近世にかけては、非常に重大な変更が起こります。式年遷宮は今日では十月に行いますが、歴史的には九月に行いました。九月に行えない時は、十二月に行います。あるいは二月に行うことも多く見られます。式年遷宮を十二月や二月に行うのは、祭主が京都から伊勢へ下向している時に、式年遷宮を行う

という便宜措置がずっと続いてきたということになります。

先ほど、神嘗祭と式年遷宮とが重なりと述べました。そもそも神嘗祭は神宮の御鎮座の日に、お供えする御饌というのが重要でした。九月十七日に内宮が御鎮座になり、外宮は九月十六日に御鎮座になりました。その御鎮座日の奉祝ということが、第一の意味でした。新穀を奉ることは、この時に収穫された新穀を神様に召し上がって頂くものです。米の文化が日本文化の基本にあるならば、神と共に人も蘇ることが最も基本的な考えです。そして、神嘗祭が正月であるという考えが神宮に古くからあります。つまり、正月とは、早稲の新穀を初めて口にする日という考え方です。現在の暦において一月一日に一年が始まるというような考えとは全く別の意識ということになります。そういう意味では、米の文化が基本として、神嘗祭を本格的にお祭りするため、二十年あるいは二十一年ごとに御殿・神宝などをすべてを改めて遷宮を行い、その後、神嘗祭を行うということが、三十四回の式年遷宮まで行われてきたということを、重要視する必要があります。

次に行われるのが奉幣です。これは天皇からの御幣を正殿に奉るという儀式です。通常の奉幣行事とは異なり、勅使・祭主以下が参道で幣帛を読み合わせ、太玉串を奉持して参進します。通常の奉幣は、四丈殿で読み合わせ行われますが、参道で行うということが遷宮時の奉幣行事の重要な点です。正宮に参進後は、勅使の祭文に続いて太玉串を納めます。次いで、東宝殿に幣帛を奉納し、五丈殿において古式饗膳をかこむという次第で進められます。ここで問題となるのは、「一社奉幣」という言葉です。神嘗祭の奉幣行事は「例幣」という言葉で一般的に言われております。恒例の御幣を奉るという意味です。それに対して遷宮祭の奉幣で「一社」という場合は、伊勢の両宮を並べて「一社」という意味になります。戦国時代に百三十年間も遷宮が行われなくなりました。そして、どうにか遷宮を行ったのが、永祿六年（一五六三）でした。その時に正親町天皇から御幣が奉ら

れました。しかし、永祿六年（一五六三）は外宮の遷宮だけで、両宮そろって遷宮が行われたのは、天正十三年（一五八五）になります。この天正十三年（一五八五）から、両宮では幣帛を奉るという新例が開かれ、神嘗祭の例幣に対して「一社奉幣」と称しました。江戸時代は幕府から多大な援助がありました。慶安二年（一六五三）の遷宮から、三代将軍の御名代として上使が差遣され、渡御・奉幣に参列をします。ちなみに、忠臣蔵で有名な吉良上野介も高家の出身で有職故実の大家ですから、元禄年間（一六八八〜一七〇四）に伊勢上使として派遣されています。上使は造宮奉行・警固奉行などを従えています。実際に安濃津の藤堂藩藩主、鳥羽の稲垣藩藩主が上使にしたがって参列していました。ここからも幕府主導型の遷宮が行われたと言えるかと思えます。

この後は、前回の遷御ビデオをご覧くださいますが、その前にビデオの内容を紹介いたします。まず、遷御当日は参拝が停止されます。十月二日午後一時以降は、一般参拝が全部停止になります。そして、参拝は宇治橋前からということになり、宮域内には立ち入れません。古殿から新殿まで雨儀廊が作られています。雨儀廊は板葺の屋根で、雨が降っても大丈夫なように屋根を作ることが特徴です。これはだいたい三百メートルほどあります。雨儀廊は遷宮祭と、即位後に行われる天皇・皇后両陛下の御親閲の両度以外は、作られないきわめて特別な屋根です。その後、奉拝席に人々が入り始めるのが、午後四時過ぎです。宮大工も参列します。また、供奉員と呼ばれる人々が、黒や赤の袍を着けて参進します。皇族代表として、前回は秋篠宮文仁親王殿下も御参列になりました。午後六時に勅使・小出英忠掌典長、池田厚子祭主以下が参進しました。そして、玉串行事を行い、両手に太玉串を執って御垣内へ入られます。午後八時前に鶏鳴三声という鶏の鳴き声をする若手神職の声が響き、午後八時に勅使が「出御」を奏上されます。そして、御列が進みだすという順序になります。前回の御列は、古殿から新殿まで約二十七分を要しました。二十七分間の神秘的な時間が流れます。ビデオで

は赤外線フィルムの映像ですから鮮やかに見えますが、当日奉拝席からは、何も見えないか、モヤモヤと見えるくらいだろうと思います。それでは、ビデオをどうぞご覧ください。

【ビデオ鑑賞】

ビデオで遷御の様子をご覧いただきました。最後に大神嘗祭について詳しく述べさせていただきます。先ほども兵乱や殿舎未柵・神宝未着など様々な事情から、遷宮と神嘗祭とが分離したと述べました。その関係を書くならば、遷御・由貴大御饌・奉幣・御遊と、遷宮と神嘗祭が三十四回までは重なりあっていました。ところが、諸事情により遷御だけ分離してしまいました。十二月の月次祭、あるいは二月の祈年祭と一緒に行わなくてはならなくなりました。しかし、そうした事情の中でも、やはり神職たちは、お祭りが続かないと納得しないという事がよくわかります。そこで、大御饌が昭和四年（一九二九）に加わりました。大御饌が最後に加わったのです。先ほど述べたとおり、奉幣は永祿六年（一五六三）の時から行われました。そして御神樂が、明治二十二年（一八八九）に行われました。大御饌・奉幣・御神樂が行われるようになって、初めて遷宮が「遷宮祭」という形になったと言えるでしょう。

さらに、もう一つ問題があります。資料では、「大御饌 昭和四年遷宮 瑞垣神饌」と書いた点です。神嘗祭の大御饌は、大御前に奉られるのが当然のあり方です。しかし、遷宮の大御饌は、瑞垣御門前に奉られるということが神嘗祭と異なります。また、奉幣についても、正殿に奉納されるのが通常ですが、遷宮の奉幣は東宝殿に奉納されます。つまり、大御饌・奉幣が、神嘗祭よりは一步も二歩も譲った様な形で奉仕されるということに注意が必要です。これは、遷宮後に行われる神嘗祭が、本来の神嘗祭であるということ象徴していると考えられます。このような点から考え合わせると、遷宮が終わったことで、神嘗祭のための祭場準備が整ったということになります。

それから、もう一点は、神霊と神器という問題があります。先ほど、ビデオの中に神宮の若手神職が「カケコー」と唱えていました。これは天岩戸神話が念頭にあり、その時の鶏の鳴き声をなぞらっているのです。今日の所作は袖を叩きますが、江戸時代には、被っている冠を叩いてカチカチと音をさせていました。所作はかなり変化しましたが、天岩戸の神開きの故事が意識されています。これは、天照大神の神霊を新しい御殿にお遷しするということが、主願に置かれてことです。それに対して勅使が正殿の階下において、「出御」ということを三度奏上すると、御列が進みだします。勅使の出御奏上の後に進みだす意味は、皇位を象徴する三種の神器一つの八咫鏡が動くということで、これを主導するのは宮内庁側ということになります。つまり、神宮と宮内庁の両者が合わさって、神話と歴史の本筋を表していると言えるでしょう。

最後に付け足しとして述べますが、江戸時代と今日では、御列の順序が異なっています。行列の中央に絹垣がありますが、江戸時代には祭主は絹垣の前を歩かれました。そして絹垣のすぐ後ろ、後陣の最前列を宮司が歩きました。ところが、明治二十二年（一八八九）になり、前陣の最後尾、つまり絹垣のすぐ前を勅使が歩かれ、絹垣の後ろ、後陣の最前列を祭主が歩かれました。そして、宮司は絹垣の中に入るようになりました。これは明治の御世になり、天照大神のお祀りは天皇のご命令で行うという側面を、しっかりと行列の上で示しているということの表れだと思えます。

以上、遷御についての想いを申し述べることが出来ました。今日の講演の機会を頂きました皇學館大学、ご来聴いただいた皆様方に感謝申し上げます、本当に有難うございました。

（なかにし まさゆき・國學院大学神道文化学部教授）

一、式年

① 随破修理

往古の神殿について『太神宮諸雜事記』によれば、破損の時を待ち太官司が修補する例とみえている。しかし二十年一度の造替遷宮が、天武天皇の御宿願により、次の持統朝に実施された。

② 式年

延暦二十三年(八〇四)の『儀式帳』は第七回遷宮の前、延喜式は第十三回遷宮の後に成立した。一・二回は二十年毎であるが、第三回から第十二回までは変化に富んでおり、その意味では延長五年(九二七)の『延喜式』以降に二十年毎が厳守された。また二十一年毎は康永二年(二三四三)の内宮遷宮からである。

③ 式月・式日

儀式帳は式月の九月とあり、大神宮式では「九月十四日粧二饒度会宮二十五日奉二從二御像一、同日粧二饒大神宮一、十六日奉二從二御像二」と、式日が定められた。外宮は十四・十五日、内宮は十五・十六日と神嘗祭の祭日に重なって、遷御日が決まっているため、当然ながら日時宣下が行われていない。

④ 工事期間

十月に造宮使の補任、明年九月の遷御とあり、察するに二ヶ年間で完了していた。ところが『文永三年内宮遷宮沙汰文』では五冬に山口・木本祭があり、四年をへた九月に遷御を迎え、前後四ヶ年を要した。近世では御杣が遠隔地にあつた関係上、元禄二年(一六八九)遷宮より現代まで前後八年間が必要となつた。

⑤ 五祭・四大饗

儀式帳では山口神祭・正殿心柱造奉・宮地鎮謝・正殿地築平・造御船代木の五祭に造宮使が吉日を撰ぶ。

⑥ 日時宣下

臨時・仮殿遷宮はともかく、定式の正遷宮ならば日時宣下は必要であるが、不安定な時代になるとその都度、朝廷に正式な沙汰を懇請するようになった。

⑦ 日時など御治定

宮内庁に対して七度に亘つて内申する。
御杣山決定および山口祭・木本祭(前回より十三年目三月) 御船代祭(同年七月)
木造始祭(十四年目二月) 鎮地祭(十六年目二月) 立柱祭・上棟祭(二十年目一月)
杣築祭・後鎮祭・遷御・奉幣(二十一年目七月) 遷御・奉幣の祭式(同年)。

二、造宮使

① 造宮使

内宮儀式帳に造宮使以下の四分官、外宮儀式帳には造宮使のみ記載。延喜式では三分

官(次官なし)、中世では造宮使のみ補任され、やがて中臣氏が世襲した。神宮参拜・宣旨拝覽のため伊勢におもむき、後代には山口祭と重なって執行された。改補があれば拝賀をやり直す。他に覆勘使・宮荘使・神宝使が別箇に任じられることもある。

② 作所

造宮使を造宮所・作所と称し、神宮では作所代が置かれたが、後代はもっぱら作所のみ呼称してきた。
『嘉禄山口祭記』では拝賀と山口祭が同日では無い。三年(一二三七)六月二十二日、大中臣隆通が拝賀、一殿にて官符拝覽の上、酒肴を済ませて内宮に向つた。但し山口祭は七月十五日に行われた。

③ 頭工

頭・頭代は律令下の木上長上にあたり、中世、宮大工の在地化が図られ、御杣における御用材の伐採・搬出から殿舎造営まで、全般的な職務に従事した。
小工は律令下の番上工に相当し、御用材の伐採から殿舎造営まで、実務を担当した。内宮は四頭四十四人、外宮三頭三十三人からなる。両宮協力の突貫工事に『建久内宮仮殿記』に「内宮東西宝殿工四十三人、外宮木工三十三人之外、屋十人、後宮下部也」とみえている。

三、山口祭 平成十七年 五月二日 前八(午十二)時

諸祭初めにあたり、御杣に入り山口神をまつる祭儀で、まず式年造宮庁総裁(大官司)・少官司以下が、古式饗膳をかこむ。次いで生調の白鶏・鶏卵を供えて、山口に坐します神をまつり、物忌が草木を刈り取る。

① 三饗同日

儀式帳によれば山口祭は御杣山に初めて入り、御杣木を伐採する祭儀に対して、木本祭とは「大神宮式」で五冬に執行され、両祭ともそれぞれ吉日を選定している。

② 再度の補任

『元禄二年外宮遷宮記』の天和二年(一六八二)九月二十六日、山口祭を執行して、造宮使(祭主)景忠が参列したが、臨時遷宮の木作始参列のため、同十月二十一日にふたたび造宮使拝賀を催した。造宮使は遷宮毎に任命されている。

四、木本祭 同

心御柱の材料を採るため、深夜に樹神をまつり、物忌が忌斧で神聖な料木を伐る。その後、御稻御倉(外幣殿)に奉安する。御料木は口径四寸、全長五尺(地上三尺、地下二尺)で、五色絹や布麻を巻付けて榊葉で飾つた。

① 忌柱

儀式帳に「取二吉日一為二正殿心御柱奉一其柱名号称二忌柱一」として別日を撰び、心御柱を伐るため、宇治大内人が祝詞を申し、忌部代が料木を伐り、御倉に納め置く。内宮は鼓ヶ岳の檜尾にはいり、外宮は土宮以南で奉採した。

② 異日

山口祭と木本祭とは別々の祭儀であるが、造宮使の拝賀に併せて、中世から「山口木

本祭」と呼び習して、同日の一祭と誤解された。近世の寛永十一年(一六三四)、外宮で再興されたが、斎館修祓・酒肴のみで、祭儀は省略されている。

③ 同日

明治二十二年より山口祭の当夜、木本祭を行なうよう日時宣下された。内宮では権禰宜が主となり、御料木を担いで御稲御倉に納めるのに対して、外宮では宮掌が主となり、物忌が御木をきり外幣殿に納める違いがある。

五、御船代祭

九月十七(十九)日 前十時

宮山にて木本に坐します神をまつり、物忌が草木を刈り初め、小工が御船代、御神体を納める船型容器の料木を奉採する。心御柱と御船代とは共に重要な料木である。

六、木造始祭

平成十八年 五月二日 後八(十二)時

造営開始にあたって作業の安全を祈り、素襖・烏帽子姿も凛々しい小工が、新殿の垂木材に手斧・墨縄の所作を加える。古来「事始神事」と呼ばれている所以である。

① 造作

『建久元年内宮遷宮記』の文治五年(一一九〇)八月二十九日条に「手斧始」と初見し、手斧で造作するという造営古法がみられる。日時勘下については永祿六年(一五六三)の遷宮例に始まる。

② 祭場

明治二十二年度から外宮祭場を、内玉垣御門前から五丈殿前に移した。三十四年四月には古儀を斟酌して修正を加え、昭和十六年、木曾山が御治定になった際、御杣山木本祭を「御杣始祭」と改称した。

七、鎮地祭

平成二十年 四月二十五日 前八(後二)時

新殿を建てる御敷地において、作業の安全を祈りこめ、物忌が草木を刈り初める。

① 忌柱・宮柱

儀式帳によれば、禰宜・大物忌が忌柱を立てたあと、内宮は地祭物忌、諸役夫が宮柱を堅め立てたが、やがて立柱祭が分離する運びとなる。日時勘下。

② 地曳

鎮地祭・心御柱祭は、文安三年(一四四六)遷宮まで同日であり、やがて地祭物忌から宇治大内人に担当が替った。また永祿六年(一五六三)遷宮より浄土を入れて均すため、「地曳」と称して立柱祭とは異日に執行された。

八、立柱祭

平成二十四年 三月四(六)日 前十時

新殿建設の初祭にあたり、屋船大神に平安を乞いまつり、小工たちが四隅に分れ、御柱を木槌で打ち固める。当初は鎮地祭に続いて、禰宜・大物忌が忌柱を立てた後、役夫が正

殿の四隅柱を堅めるものであったが、やがて四隅柱が中心となった。

① 柱堅

儀式帳に「諸役夫等柱堅奉」とあり、本来は式年一年前の鎮地祭と同日に行われたが、寛正三年(一四六〇)の内宮遷宮より、式年の異日に行われた。近世は立柱のあと立心柱が行われたが、明治二十二年遷宮で遷御直前に行うように変更された。

② 工法

御柱を立て起して御壁板を入れ、棟を上げる工法からすれば、立柱から上棟へと一連の流れとなる。その立柱・上棟が分れた背後には、享祿年間(一五二八〜三二)における工具・工法の目覚ましい発達があった。大工道具について、古来の楔・槍鉋から大鋸・台鉋への進歩があり、造営工事にも変化があったと考えられる。(荒井留五郎「立柱小論」)

③ 轆轤

『寛延二年外宮遷宮記』の同年(一七四五)正月十五日に克明に伝えている。つまり以前の柱穴に盤木を据えて、小工たちが轆轤を回転させて綱を操り、東柱の柱根を斜めに穴中に入れ、西柱に梁を載せて壁板を縫合し、最後に正殿を雲形幕で張り巡らした。

④ 殿舎復興

寛文九年(一六六九)九月六日に内宮、二十八日に外宮で執行された。殊に正宮・別宮・宝殿・御門・御垣、さらに御装束や神宝・金物などが、旧例を守って整齊の美感が尽くされた。出口延佳が『二所皇大神宮遷宮次第記』に、歴史的な意義を説いている。

惟フニ如キハ、今般ノ継テ三百年來タルヲ、二門千木崇ク起玉垣御門・寶殿御門今復興、興シテ二百余年之廢タルヲ、玉垣一重長ク廻リ、加之御内殿外之瑞荘、悪々トシテ復全ク備レリ、

九、御形祭

三月四(六)日 後二時

建築の完遂を祈り、新殿の妻の束柱に「御鏡形」、つまり円形の図様を穿ちまつる。頭工にとつて、心御柱の奉建とならぶ秘儀とされてきた。

① 御使

儀式帳によれば殿の東西妻にある短柱に、神宮方が御形をうがち、朝廷より御使が参向して金物を打ちまつた。しかし後には神宮方の祭儀となった。

② 奉彫

梁上に束柱があり、丁字の部分を鏡形という。酒餅を供えて後、墨をもって円形を描き、其処を穿つて鏡形を飾り、あとで饗膳が行われる。

③ 御金物

『文永遷宮記』に初見するが、『寛正三年内宮遷宮記』では絶えている。『寛文外宮遷宮記』の九年(一六六九)三月十二日条に「奉し飾御鏡形金物」とあり、年来錯乱のため正中・貞和の古図を参考に、金物を釘で打ち固めたという。

十、上棟祭

三月二十六(二十八)日 前十時

新殿にて瑞垣までの丈尺を測り、「千歳棟・万歳棟・曳々棟」の音頭につれて小工が御棟木を打ち固め、大官司以下が棟木を奉曳する。竇屋根に包まれた新殿の清楚な佇まいが拝

せられる。

① 棟木

儀式帳では宮地鎮祭のあと、役夫の柱堅に及ぶが、上棟次第は見当たらない。『遷宮例文』に前年秋、立柱同日と初見する。日時勘下。

② 立柱・上棟

『元亨三年内宮遷宮記』によれば、前日までに立てられた御柱の、柱上の木口を切り揃える事から上棟祭が始まっている。

③ 覆勘使

棟木を上げるのは、工匠にとつて極めて重要なことであり、覆勘使が赴いて殿舎の古儀丈尺を踏襲するため、覆勘行事を行なった。

明治二十二年遷宮で、丈尺検度を加えて属が丈量をはかり、四十二年には大宮司以下が東西に分かれて、ともに引綱を曳く奉揚式が加わった。

十一、檐付祭

五月二十三(二十五)日 前十時

① 葺初め

新殿の御屋根に、葺葺役が御葺を清々しく葺き初める。

② 針返

軒の両妻に蛇腹を貼り付けて、御葺を葺き始めることで、『遷宮例文』に初見する。正殿の御屋根に椀皮を差し、その表に葺を葺き、下の棧に蕨繩を通して縫い固める。番匠工を殿内に踏み込ませないため、屋上より縄針を徹すと、針返役人が殿内よりこれを反すのが古例である。

③ 屋根構造

天正遷宮に際して、屋根を厚板で覆い表葺を葺いて、忌鍛冶が針で固めたので針返しが必要となった。近世では御葺を宮司が担当し、材料は將軍家から出た。

十二、葺祭

七月二十一(二十三)日 前十時

屋船大神に新殿の堅固さを祈って新殿の葺を葺き終え、次いで葺き収めた屋根の上部に、葺覆の御金物を飾りまつる。

① 宮飾り

葺祭とは屋根の葺き終りを告げる祭儀で、本来は宮荘使が差遣され、殿外における金物を宮飾りし、やがて葺覆の波金物、千木の逆輪を打ちまつる祭儀となった。

十三、御戸祭

平成二十五年 九月十三(十五)日 前十時

頭工が新殿御扉に鑰穴を穿って、竣工を告げる祭儀で、宮大工の総仕上げにあたり、これが終わると御門御鑰が神主に引継がれる。

① 「御戸立祭」「清匏」とも称し、『遷宮例文』に初見する。日時は禰宜選定。

② 一頭方が新殿に昇って鑰穴を穿ちまつり、次いで二・三頭方が殿内を削り清める。

② 明治二十二年の遷宮では神祭のあと、小工が御扉に鑰穴を穿つものへと改定された。

十四、御船代奉納式

九月十七(十九)日 前十時

神聖な御形を納めまつる御器のことで、東宝殿において技監・技師が御船代を奉彫し、これを禰宜が検知して新殿内に移納する。(以前に御船代祭がある。)

① 秘儀

近世の『享保十四年外宮遷宮記』に同年(一七二九)八月十日、船代祭として禰宜・権官が本宮拝し、禰宜が御鑰を捧げて御扉を開く。東宝殿を開いて御船代をそれぞれ生絹を覆い、頭・頭代・小工が新殿の大床に奉居する。明治二十二年には伐採と奉彫を次のように区別している。

イ、伐採

禰宜以下が宮山祭場につき、主典が神饌、禰宜が祝詞を奏し、次いで宮掌が草木を刈り初め、忌斧を執って伐木を行なう。(御船代祭)

ロ、奉彫

正宮拝をへて、新宮の御扉を開く。東宝殿において属が覆面・手袋をつけて奉彫を行なう。宮掌総員が御船代を担いで新宮の大床に置き、さらに正権禰宜が殿内に入れて奉居する。(御船代奉納式)

十五、洗清

九月二十四(二十六)日 前十時

新殿の竣工にともない、禰宜が殿内の御樋代・御船代など、権禰宜が殿外をそれぞれ洗い清め、さらに東西の宝殿や御饌殿(外宮)に及ぶ。

『建久九年内宮遷宮記』に「於御板敷者、日中許為内物忌父等役、所奉洗淨也」とみえる。

十六、杵築祭

九月二十八(二十九)日 前十時

新殿の柱根を大宮地に撞き固めるもので、まず古式饗膳、続いて奉仕員が白杖を執って固めつつ、室寿の古歌を謡いながら三周する。

かしこしや 五十鈴の宮の杵築してけり 杵築してけり 国ぞ栄ゆる 郡ぞゆる

万代までに 万代までに (内宮二首の内)

① 浄土

儀式帳では、正殿の宮地に役夫が運んだ浄土を、禰宜・内人などが築き均して歌舞を行なうとあり、大神宮式にも神殿地を築き均すとみえる。日時は禰宜選定。

② 白杖

檜製の白杖で長さ五尺三寸、切口一寸。

③ 明衣

清浄な衣服のことで、禰宜・宇治大内人・大物忌父以外は、当祭において官下されたが永祿期に廃絶。天正以来は作所が調製し、寛文期に官庁が私力で復興した。

④ 後鎮祭

明治二十二年に饗膳・杵築・神祭・天平瓮という次第になり、次の四十二年には天平瓮を後鎮祭で扱うものと分離するに至った。(後鎮祭、後述)

十七、心御柱奉建 九月二十五(二十七)日 後八時

御稻御倉(外宮は外幣殿)に奉安してきた心御柱を、新殿の御床下に秘めやかに立て、榊葉を覆いまつる。古くは立柱祭の初めに立てられたが、現行では新殿竣工後である。

① 秘伝木

古くは心御柱を奉建するまで、他の柱穴は掘らないのが原則であった。儀式帳に「禰宜・大物忌忌柱立始」、延喜式に「地祭物忌清掃其地」、掘心柱穴「禰宜堅柱」とみえ、秘伝木のため深夜、禰宜・大物忌が奉立する古例であった。

② 奉飾

『外宮遷宮要須記』に心御柱に巻布・結麻・榊葉について、次の通りみえる。

彼御柱口徑四寸也、地上三尺、地下二尺、已上五尺也、五色薄衣布麻等^以奉^立、卷^二飾^一之差^二榊葉^一也、

③ 立遣い

建久七年(一九〇)六月一日の神主注進状によれば、立心柱がすんだ後、去る四月に頭工たちが心御柱を点検した。心御柱が東方に四寸、北方に二寸三分相違することが判明したので、勅錠をもって遷御前に立替えることになった。

十八、後鎮祭 十月一(四)日 前八時

新殿竣工を鎮謝して大宮地の安泰を祈り、盆状の容器(天平瓮)を奉安する。大宮地の平安を祈った鎮地祭に対して、当祭は「御礼返し」の意味から後返祭とも呼ばれている。

① 天平瓮

天平瓮は諸神参向の座、あるいは神供の土器といわれ、宇爾郷の土器役人が天平瓮を供え

た。外宮の儀式帳に次のように見える。

宮造畢、次後返祭并山口祭仕奉用如^レ始、然天平賀柱諸木本別置、員式十余口、造^二多氣郡宇爾郷人夫等^一、

② 執行順

遷御の前後に行われるが一定していない。中世の寛正内宮遷宮では三年(二四六)二月二十七日に後鎮祭、同日に遷幸となった。また近世では寛文九年(二六六)九月二十八日に遷御、同日夜に後鎮祭が執行されている。

十九、御装束神宝誦合 十月一(四)日 前十時

新たに調達された御装束・神宝を、新四丈殿において検分する。御装束は御召物、殿内

奉飾品など、神宝とは殿内奉納の威儀物をいう。

① 御料

儀式帳によれば、新宮遷奉御装束九種・種代御装束六種・出坐御床装束七十七種、宝殿物十九種に対して、外宮は御装束物三十六種と記載している。

② 奉遷状・奉進状

儀式帳では九月始め、神宝類を伊勢に送らしめ、遷御当日の早朝、御飾行事を行なった。つまり使・官司が御装束物を捧げて参進、諸員が内院に参入して、使が新宮仕豆奉遷状および御装束備奉進状を奏上した。さらに遷御後に官符注文を讀申して、御装束・神宝を讀み合わせる。

③ 神殿装飾

遷御後、御金物から御装束に至るまで、官符の注文にしたがい御金物・御装束・神宝を讀合せ、神殿を装飾した。

④ 送文・木尺

『寛文九年外宮遷宮記』では九月二十九日に読合があり、行事所において読合役人が式目を讀上げ、物忌父が御装束に木尺をあてて測った。さらに明治二十二年には、新宮四丈殿に祭場を移して主典が送文を讀みつつ、御装束を木尺で測るよう改正された。

二十、川原大祓 十月一(四)日 後四時

川原大祓とは遷御当日、祓戸神の靈威を讀えて、奉遷御料・神宝辛櫃および奉仕員を、すべて祓い清める儀式。

① 儀式帳によれば十六日、駅使・王などが御装束物を神宮に届け、大官司と共に玉串所に至る。それに先立ち禰宜・内人・人垣男女が西河原で祓い清めて、明衣を賜わった。

② 『建久元年内宮遷宮記』によれば、御装束・諸員を一緒に祓っている。久しく中絶していたが、寛永二年(二六二五)遷宮に際して復興。禰宜・権禰宜・内人が奉仕するが、駅使・官司の姿は見当たらない。

③ 明治二十二年の御儀では、祭主以下が新四丈殿にて御装束神宝の誦合を行ない、終われば辛櫃を川原祓所に運んで、諸員と共に祓いをうけるよう修正された。

二十一、御飾 十月二(五)日 午十二字

遷御当日、新旧両宮ともに御装束・神宝辛櫃を本殿、または新宮の御床下に安んじて、大少官司・禰宜が殿内を装飾、遷御の諸準備を整えて祭主の検知をおおぐ。

① 次第

儀式帳によれば、内宮は九月十四日に壁代・帷子などを装飾。十六日亥刻、遷御に先立って御飾が行われる。

まず使中臣が、瑞垣御門前で新宮奉遷状を奏上。さらに遷御後に新宮にて御装束奉進状(遷奉大神宮祝詞)を讀進する。次いで大物忌の手付初があり、禰宜以下が開扉して、御

壁代・蚊帳・御床・御装束などを飾りつける。終われば使が直会殿に退くという。

以二亥時一始^三、然即御装束物、皆悉持参^二入^三内院中御門^一、使中臣告刀申、

新宮仕豆遷奉状并御装束備奉進状如之申畢^三、使中臣一人并太神宮司御装束物^二平令持^三、新宮爾参入^二、正殿御橋下侍^一、爾時大物忌先参上、手付初、次禰宜参上^二、正殿戸開奉^一、正殿内四角、灯油燃^二天御装束具進畢、皆悉羅出、但使^二外直会殿坐^一、

〔皇太神宮儀式帳〕御形新宮遷奉時儀式行事条
また外宮では十三日に壁代・帷子を装飾し、十五日に御装束物を進納する。また大神宮式では奉飾前に祭主が新宮仕遷状を奏上している。

② 裁縫

絹垣・行障は官下物であったが、中世から忌火屋殿で裁縫行事があり、調製が必要となった。慶長十四年（一六〇九）遷宮に東宝殿下で、権禰宜が絹垣・行障を糸針で縫い、支え棒に紙縫りで結わえた。外宮では寛文九年（一六六九）遷宮に、庁舎で行っている。

二十二、遷御 十月二（五）日 後八時

大御神が本殿から新殿へとお渡りになる遷御とは、遷宮祭きろての至高の秘儀である。参道沿いの奉拝者が厳肅な時刻を待つほどに、勅使・祭主以下が参進。古殿の御扉をひらき召立につれて、前陣・後陣の列次をくむ。午後八時、「カケコ」と鶏の鳴声をなぞり、勅使の「出御（進御）」が唱えられると、絹垣に秘められた大御神の御列が、瑞々しい新殿へ厳かに渡御される。

① 次第

イ、『皇太神宮儀式帳』

延暦二十三年（八〇四）九月十六日

太神宮使、取物・人垣を召集。衣笠・刺羽・玉串・人垣が分立。太神宮司が正殿階下へ待ち、禰宜が開扉。正体・相殿を奉戴。禰宜・宇治大内人・大物忌父・諸内人・妻子・使中臣が参入。禰宜が殿内に入る。御装束注文を読み、御床代を進納する。諸員退き八度拜。勅使は直会院に入る。

ロ、『建久元年内宮遷宮記』

建久元年（一一九八）九月十六日

祭主が外宮御祭後、内宮に至り玉串行事。禰宜・宮司・祭主が御前に列する。召立に取物を渡し、鶏鳴につれて渡御。祭主が警蹕をかけ、宮司が供奉する。禰宜以下、神財を納め、祭主以下退き、八度拜。遷御注文を進る。饗膳は由貴大御饌奉仕につき、各宿館に送付する。

ハ、『寛文九年外宮遷宮記』

寛文九年（一六六九）九月二十七日

亥刻、禰宜以下、庁舎に列立。仮御櫓代・絹垣・行障を出し、正権禰宜が御池坂を受ける。奉遷使・祭主・宮司も二鳥居で清め、行事所で太玉串を執り、正宮に納める。禰宜が正宮・東宝殿を開き、使の告刀、禰宜が新宮の御扉を開く。召立につれて神財を捧げ東西に分立。進御して新宮前にて再び召立、神財を殿内外に納める。階前にて使が告刀を申し、八度拜。退いて奉遷使・宮司・禰宜が、一殿につき饗膳。勤行文に禰宜・宮司・使が加署して帰館する。

ニ、『明治二十二年両宮遷宮諸祭式』

明治二十二年十月二日

午後八時、奉遷使・掌典・祭主以下、二鳥居外に進む。儀仗兵整理。行事所に列立。太玉串を進めて、正宮中重に着版。祭主以下、太玉串を奉奠して、諸員内院に進む。奉遷使の祝詞のあと、宮司が開扉する。祭主の殿内伺候があり、主典が召立文を讀上げ、執物を手交する。鶏鳴・出御があり渡御する。正権禰宜が新殿内に入り、召立に随い御料を奉納する。祭主・正権禰宜の降階後、宮司が開扉、諸員八度拜して退下する。

② 詞文

上代に二通の詞文が奏上されたが、既に『建久九年内宮仮殿遷宮記』に見るとおり、移使が奉遷・奉鎮の祝詞二通を奏上するように変化している。

移使先参、寄^二御橋際^一、奉^二遷^一新宮^一之由、被^二申^一詔刀^一云々、遷幸訖移使脱^二沓進^一参、奉^二鎮^一新宮^一之由被^二申^一詔刀、遷^二本座^一拜^二四度^一、無^二手^一、但奉^二折^一朝廷^一也。こうした形式が近世では、遷御を前後する一紙両面の祝詞へと変化している。

以^二厚紙^一一枚^一中折、一片書^二遷御告刀^一、一片書^二遷坐告刀^一、

〔元禄二年外宮遷宮記〕一

③ 主上の御遥拝

『禁秘御鈔』によれば寛治六年（一〇九二）の仮殿遷宮の夜、物忌の最中であつたが、あえて東庭において御拝あらせられた。

④ 近代の盛儀

明治二年九月四日に内宮、七日に外宮で遷御が行われ、天皇には同時刻、皇居の庭上に降り立たれて、遷御の儀を御遥拝なさつた。また昭和四年十月二日に内宮、五日に外宮で遷御が行われたが、総理大臣・内務大臣・三重県知事などが奉拝を許された。

二十三、大御饌 十月三（六）日 前六時

遷御の翌朝、新殿の瑞垣御門前において、大御前に初めて大御饌を供進し、大宮司が祝詞を奏上する。ここに大神嘗祭の意義が籠もっている。

① 新殿の新穀

『元亨三年内宮遷宮記』によれば、三年（一三三三）九月十六日夜の渡御は、御巫内人の鶏鳴があり出御、前陣・御使に続いて絹垣が進み、後陣が続いて新宮に到る。神宝を殿内の左右に立てて、神霊を鎮めまつり御戸を閉ざした。装束を交えることなく、由貴大御饌のため参進する。神嘗祭に極まる遷御という最後の御儀となった。

（九月）十七日御饌事、十六日夕者、於^二古殿^一備之、十七日晚者、於^二新殿^一備之云々。

② 鎮座日

中川経雅著『大神宮儀式解』に、「鎮座日」を期して「新穀」が奉られる式日、二十九年正月の当日を迎えた、遷宮の挙行理由が明快であろう。

大御神遷宮式日は九月十六日なり。毎歳由貴御饌供へ進も九月十六日なり。六月十二日にも遷宮す。仍て遷御畢て例の由貴御饌供へ奉る。今日新穀の御饌奉る日なるによりて、今日を遷御の式日と定メしなり。遷御式日は由貴御饌奉る日より定む。その御饌を今日奉るは、明十七日鎮座日なるに因たるなり。御饌式日は鎮座日より定む。十六日新宮に遷し奉り、即御饌を供り、翌鎮座の日神嘗幣帛奉らるるを見ゆ。

（九月）十七日御饌事、十六日夕者、於^二古殿^一備之、十七日晚者、於^二新殿^一備之云々。

二十四、奉幣 十月三(六)日 前十時

恒例の奉幣行事と異なり、勅使・祭主以下が参道で幣帛を読み合わせ、太玉串を執って進む。勅使の祭文に続いて太玉串を納める。次いで東宝殿に奉納、五丈殿において古式饗膳をかこむ。

① 一社奉幣

遷御の皆済を慶んで幣帛を捧げるもので、外宮が永祿六年(一五六三)九月にはじまり、両宮としては天正十三年(一五八五)九月より執行した。つまり『外宮天正引付』によれば、百三十年ぶりの御儀に際して、正親町天皇の「因_レ茲改_レ先規_一」兵行_レ權儀_一、不_レ請_二非礼_一礼都神慮難_レ測_一と、権儀を祈謝する宣命を掲げている。

天正十三年(一五八五)の両宮遷宮より恒式化され、神嘗祭の例幣に対してこれを「一社奉幣」と称した。幣帛は正殿奉奠・東宝殿奉納という月次祭に準ずる形式をとる。

② 上使

慶安二年(一六四九)遷宮から三代将軍の上使が参拝し、造宮奉行・警固奉行を従え、太刀・馬代を献上する例となった。

二十五、古物渡 十月三(六)日 後二時

遷御翌日、古殿に収蔵されていた幣帛・神宝類を新宮に移納し、古宮を破却する。

① 古物

延喜式に「其旧宮神宝、遷_二取新殿_一」と規定し、『遷宮例文』には古物渡・錦綾分配・古殿分配とある。

古殿に火燈役を控えさせ、禰宜たちは新宮石壺につき、権禰宜が参昇して神宝を入づてに渡すと、鳥居辺に控えた役人が清める。古神宝のうち玉纏御太刀は本様見本として、新宮西宝殿へ奉納するよう鄭重な配慮がなされた。

② 頒賜・代値

遷宮後の古装束類は、中古まで分配に預かった。しかし天正十三年(一五八五)遷宮に装束分配が停止され、慶安二年(一六四九)遷宮から代価として現米三百石が下されることになった。

③ 古殿

『文永三年御遷宮沙汰文』に翌年破却という中世の慣行がみえるが、永祿・天正の遷宮再興後、次期遷宮の鎮地祭まで保存された。ところが明治二年に中世の慣例に準じて、遷宮後、半年間で撤去することになった。

二十六、御神楽 十月三(六)日 後七時

御儀皆済の祝意をこめて午後七時、勅使・祭主以下が四丈殿に進み、宮内庁の楽員が御神楽と秘曲を深更まで奏でる。

二十七、大神嘗祭

① 遷宮祭

遷御 ↓ 遷御
由貴大御饌 ↓ 大御饌 昭和四年遷宮 瑞垣神饌
奉幣 奉幣 永祿六年(一五六三)遷宮 東宝殿奉納
御遊 御神楽 明治二十二年遷宮 宮内省楽人
兵乱や殿舎未作・神宝未到など様々な事情から、遷宮と神嘗祭とが次第に離れてしまつたが、祭儀として体裁を整える上から、諸祭が次第に整えられることになった。

イ、永祿六年(一五六三)の外宮遷宮が実施され、正親町天皇の祈謝宣命が奏上された。

天正以来、これが例幣に対する「一社奉幣」の事例にしたがい、遷宮祭に加えられた。

ロ、造神宮使庁が明治二十二年遷宮に、「御神楽」が宮内省楽人によって奉奏された。

② 神霊と神器

遷御の儀は、陣列が進御するに先立ち、宮掌が鶏鳴を唱え、勅使の出御という合図がある。宮掌が天岩戸神話をなぞって鶏鳴となえ、天照大御神の「神霊」が動座なさる。また勅使が御階下で出御を申され、「八咫鏡」に対する「神器」の祭祀理念を明示している。こうした作法を神話と歴史の両面から表現しているのである。

宮掌 鶏鳴三声 瑞垣御門下 神話世界の再現 「神霊」
勅使 出御三声 正宮御階下 天皇主宰の理念 「神器」
八咫鏡

